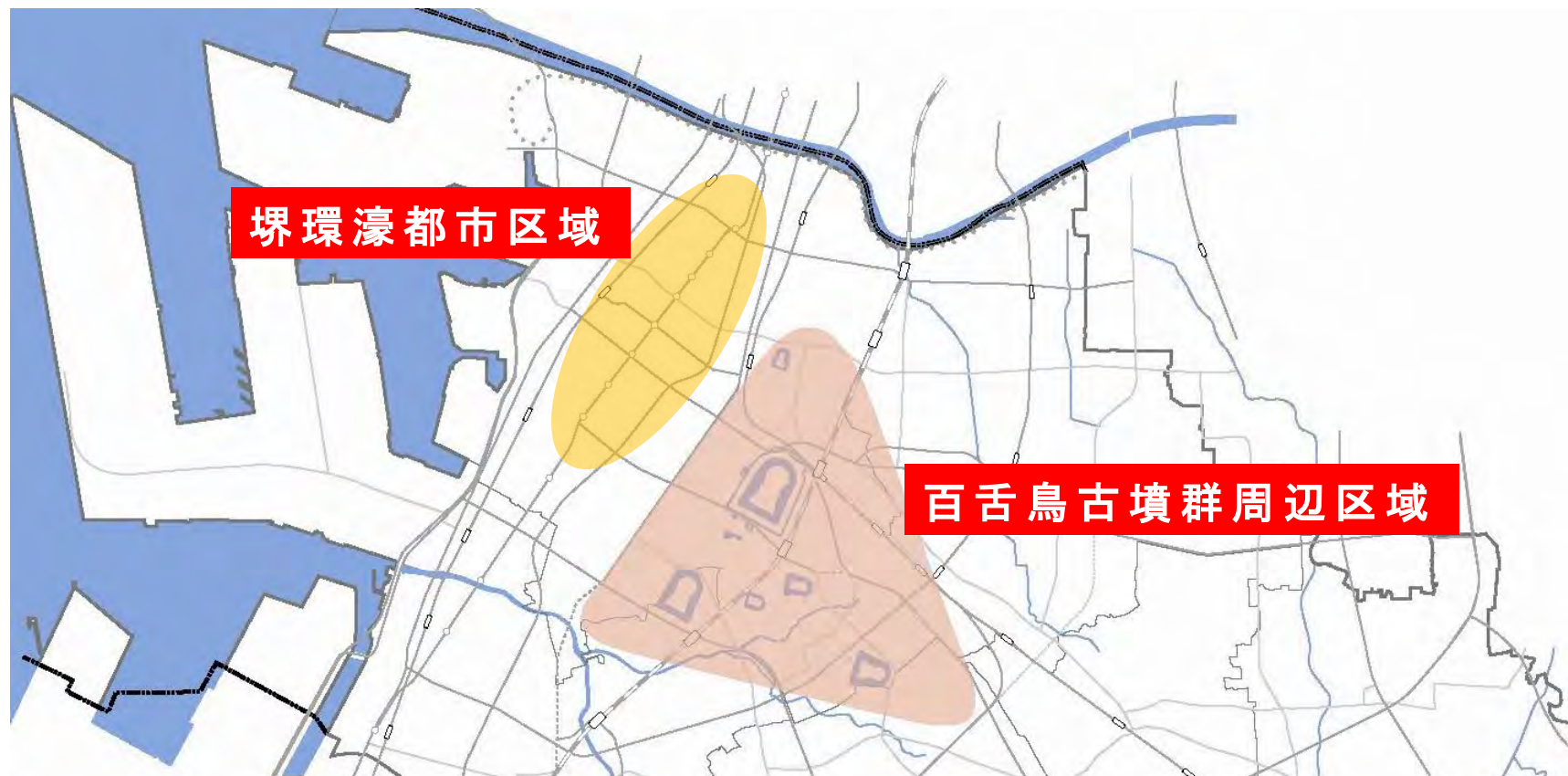


重点区域設定の方針

- 堺を代表する歴史文化資源を有する区域
- 歴史的風致の維持及び向上により、歴史文化を活かしたまちづくりを推進する必要がある区域
- 歴史文化資源の消失が進むなど、特に重点的に歴史的風致の維持及び向上を図る必要がある区域



12-2 堺環濠都市区域(1)

和泉と摂津の国境に成立した堺は、中世に勘合・南蛮貿易によって栄えた港町である。天文12年(1543)の鉄砲伝来後は鉄砲の一大生産地としても栄えた。その後慶長20年(1615)大坂夏の陣で焼失後行われた元和の町割りが現在も街の骨格となり、現在に伝わる。古い街区や濠などの骨格をとどめつつ、地場産業である、包丁線香などの伝統産業を継承した職住一体の生活様式を示す景観が今も伝わる。旧市街地の南北に通過する紀州街道については、明治40年以降、阪堺電車が開通し大阪では唯一の路面電車として今も「チンチン電車」の愛称で市民に親しまれている。また宿院頓宮へは住吉大社よりお渡りが現在も行われるなど、伝統行事も今に息づいている。

伝統産業にみる歴史的風致



刃物



線香

歴史的建造物にみる歴史的風致



お渡りにみる歴史的風致



町割りにみる歴史的風致



「堺大絵図」元禄2(1689)

交通にみる歴史的風致



12-3 堺環濠都市区域(2)

項目	堺環濠都市地域と元和の町割り	
概要	<p>慶長20年（1615）の大坂夏の陣後に徳川幕府の天領として整備された旧市街地である堺環濠都市地域は、南北3 Km、東西1 Kmの周辺を環濠で囲まれるエリアである。</p> <p>江戸時代に徳川幕府の天領として再編された「元和の町割り」は現在も踏襲される。</p> <p>周辺を囲む環濠は現在、北端は市道三宝高須線、東端は阪神高速となって濠割が失われているものの、南端、西端には環濠の面影をとどめる。</p> <p>エリア内では、江戸時代から続く街区や濠などの骨格を留めつつ、中世から伝わる包丁・線香などの伝統産業を継承した職住一体の生活環境を形成している。</p> <p>街の中心部には紀州街道（大道筋）が南北に貫かれ、中央部には東西に大小路通がはしる。</p> <p>紀州街道には、明治44年に開業した路面電車が走り、沿道の歴史文化資源と相まって、昔懐かしい趣ある景観が形成されている。</p>	
伝統的な活動等	江戸時代以前	<p>中世の堺環濠都市内には、現在の町割りとは全く方向性の異なる自然地形や条里等に規制された複数の街区パターンが混在していた。</p> <p>中世段階の街区は、直線的な道路が規則的に直交しているのではなく、不規則に蛇行しながら都市内を走っていたものと考えられる。</p> <p>濠は都市外周を囲う「総（惣）構え堀」的な環濠のみならず、都市内部を縦横に走る内堀も存在しており、この景観を見た当時のヨーロッパの宣教師は「堺はベネチアの如く・・・」と表現している。</p> <p>この時期堺は、有力町衆によって構成された会合衆による自由都市として発展する。</p>
	江戸時代	<p>中世の都市域は、慶長20年（＝元和元年・1615）の大坂夏の陣で全焼。</p> <p>その後徳川幕府の天領（直轄地）として、都市域は中世よりも一回り大きく拡大し、全域が統一的な町割プランに再編され「元和の町割り」と呼ばれている。</p> <p>この町割りの街区構成は、短冊型地割で両側町を形成している。</p> <p>都市内に散在していた寺院は、この町割りの際に都市東端に移動・集居させられ、いわゆる寺町を形成する。</p> <p>濠は都市域拡大後の外周に、新たに江戸期の環濠が掘り直された。</p> <p>江戸時代に入っても、刃物、鉄砲、線香などの生産が盛んで、引き続き畿内における有数の産業のまちとして展開する。</p>
	明治以降	<p>第二次世界大戦で中心部は焼失するものの、北端・寺町・南端は被災せず、現在の町並みは、基本的には街区構成も含めて「元和の町割り」が維持される。</p>
歴史上価値の高い建造物	<p>山口家住宅・南宗寺・海会寺・大安寺（重文）、鉄砲鍛冶屋敷（市指定）、清学院（登録）、堺燈台（史跡）</p> <p>元和の町割り、『元禄堺大絵図』、旧町名（目なし丁）、ちんちん電車（明治34年開通）</p>	
良好な市街地の環境	<p>江戸時代から続く街区や濠などの骨格を留めつつ、中世から伝わる包丁・線香などの伝統産業を継承した職住一体の生活環境を形成している。</p> <p>それら伝統産業を活かした店舗が点在し、まち歩き観光の立ち寄り所となっている。</p> <p>その一方で、中心部の大道筋や大小路通の沿道では高度利用による商業、業務系施設などが立地され、新旧混在とした都市景観となっている。</p>	

12-4 百舌鳥古墳群周辺区域(1)

百舌鳥古墳群は、4世紀後半から6世紀にかけ、100基を超える古墳が造られたと考えられるが、現在は47基の古墳が残されている。古墳は「日本の歴史公園百選」にも選定されている大仙公園内や公園に近接していることもあり、古墳周辺や園路ではウォーキングやランニング、散策を楽しむ人が多く見られる。また、古墳まわりや古墳の堀内は市民による清掃活動も行なわれており、風致地区、第1種低層住居専用地域と相まって良好な住環境を形成する。

古墳と人々の関わりは、中世以降の灌漑水利としての古墳の堀水の利用や薪炭確保のための古墳樹木の伐採等にはじまる。このような里山的な古墳の存在は現在も形を変え、地域住民にとっての大切な自然環境、住環境として切り離せない風致となっている。

古墳・周濠にみる歴史的風致



古墳周遊のサイクルロードレースの実施

公園・緑地にみる歴史的風致



古墳の配置にみる歴史的風致



市民による古墳の清掃活動

12-5 百舌鳥古墳群周辺区域(2)

項目		百舌鳥古墳群と住民との共生
概要		<p>百舌鳥古墳群は、4世紀後半から6世紀にかけて、100基を超える古墳が造られた。都市化の進展などにより既に半数以上が失われ、現在は47基の古墳が残されている。7基の古墳が国の史跡に指定されており、さらに、23基の古墳が陵墓として、宮内庁により管理され、今日まで祭祀が行われている。</p> <p>市民の古墳に対する意識は高く、いたすけ古墳が昭和30年代に破壊の危機に瀕した際に、保存運動によって守られた経緯がある。堺市の文化財保護のシンボルマークは、この古墳から出土した冑形埴輪をモチーフにしている。</p> <p>今に残る古墳の濠は、周辺で営まれる田畑を潤すため池として、現在も水利組合により管理されている。また、近年まで古墳内の樹木を、薪炭として用いており、地域住民の生活に密接にかかわってきた。</p> <p>百舌鳥古墳群の中心には「日本の歴史公園100選」に選定されている大仙公園が位置し、園路には古墳が点在する。また、周辺の住宅地にも古墳が残されており、築山のような景観をなしている。古墳群内には周遊路の整備が行われ、大仙公園とともに府内外から多くの人々が訪れている。</p>
伝統的な活動等	江戸時代以前	<p>百舌鳥古墳群は、平安時代になっても墳墓として認識されていた。延長五(927)年の『延喜式』諸陵寮に仁徳天皇陵古墳を「百舌鳥耳原中陵」と記すなど、陵墓として認識されている。また、正治二年の諸陵雑事注文では、仁徳天皇陵古墳に供物をおく記述がみえる。</p> <p>中世になると、百舌鳥古墳群周辺において耕地開発が行われている。この頃の開発で、古墳の濠をため池や耕作地に改変しており、田畑の間に古墳が点在する景観をなしていた。</p>
	江戸時代	<p>仁徳天皇陵は、堺奉行による管理が行われ、三天皇陵は元治元(1864)年には宇都宮藩による修築が行われている。</p> <p>慶長十三(1608)年に狭山池の再興修復を実施した後、寛文二(1662)年には狭山池の水を仁徳天皇陵古墳の濠まで引いていた。この頃、百舌鳥古墳群周辺では耕作地の拡大や生産高の向上がなされており、大型古墳の濠は、ため池としての機能向上のため、堤の改良や浚渫が行われた。</p> <p>古墳に生えた樹木は、周辺住民の貴重な燃料として活用され、里山として管理されていた。</p> <p>また、御廟山古墳の後円部に延享四(1747)年銘の石灯籠が残されており、近世には、百舌鳥八幡宮の奥之院として祀られていた。</p>
	明治以降	<p>明治以降、23基の古墳が陵墓として宮内庁により管理されている。</p> <p>古墳の濠は、農業用水として現在まで水利組合により管理されている。</p> <p>また、近代以降、仁徳天皇陵古墳・履中天皇陵古墳周辺を皮切りに区画整理による住宅地開発が行われ、市街化が進む。この際に多くの古墳が失われ、破壊を免れた古墳も住宅地のなかに取り残された。</p>
歴史上価値の高い建造物		<p>仁徳天皇陵古墳 反正天皇陵古墳 履中天皇陵古墳 ニサンザイ古墳 いたすけ古墳(史跡) 塚廻古墳(史跡) 収塚古墳(史跡) 長塚古墳(史跡) 丸保山古墳(史跡) 乳岡古墳(史跡) 文珠塚古墳(史跡) 高林家住宅(重文)</p>
良好な市街地の環境		<p>百舌鳥古墳群の中心には大仙公園が位置し、周辺は風致地区に指定されている。また、大型古墳の周辺は、第1種低層住居専用地域となっており、古墳の周囲に低層の住宅がひろがる良好な住宅環境を形成し、古墳と調和した独特の景観をなしている。</p>